チャイム

ヒロシ

　このボロ屋にふさわしい安っぽい機械音が来客を告げる。人は何故、こんなものを作ってしまったのだろうか。
　「こんにちは」と声がすれば、その質から男であるのか女であるのかわかり、若者か中年か老人かもある程度知ることができる。
　しかしこの機械音は、全ての人平等に同じ音。
　近所の人であれ、友人であれ、訪問販売であれ、宅配便であれ、強盗であれ。

　再び音がなる。

　玄関には鍵がかかっていない。本能が「気配を消せ」と訴える。冷蔵庫の扉にピタリと付いて目を閉じた。玄関の気配に全神経を注ぐ。

　まだ何者かがいる。

　カタ、ココン、カコ。

　郵便受けに何かを入れたか。微かな足音が遠ざかってく。
　それからたっぷりと間を置いて、裏口へ行きドアを開けた。

　外へ出ようとした時、またチャイムが鳴った。
　「こんにちはー」
　体が固まる。
　「こんにちはー」
　声と共にチャイムが鳴る。
　「いたの？」
　玄関が開けられた。

　それを察知した瞬間、音を出さずに急いで家から遠ざかった。

　悲鳴が聞こえた。